あの空の向こう側

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの空の向こう側

【Ｎコード】
Ｎ８７３３Ｊ

【作者名】
日野五十鈴

【あらすじ】
帝国航空隊員・アカギとカガ。どこもかしこも正反対な２人が織り成す、ちょっぴり切なくちょっぴり心暖まるストーリー。

今日の訓練は、いつもに比べたら比較的楽な方だった。

だのに、夕食の時間になるなり向かいの席で豪快にむしゃむしゃ食べるカガに、アカギはひたすら呆れた。

（飯をバクバクじゃなくガフガフッ！　って食べる奴を初めて見た…）

カガは航空隊でも古参の人間だった。１５のときに志願して航空隊入りし、それ以来戦闘機を操る人間を補佐しては、共に武勲をたてて帰ってくる。

反対に、アカギは最も新参の航空隊員だった。それまで学生だったのを、連合軍に悪戦を強いられた結果徴兵され、つい先日少しばかりの基本的な訓練を受けただけで、こうしてここに所属されたのだ。

したがって2人は同い年でありながら、戦闘経験から性格まで天と地ほどの差がある。アカギが氷のような少年であるのに対し、カガは青空を連れてくるような少年だった。

「ごちそーさんっした！」

飯を食うのも速い。

カガは食器を片すと、フンフンと鼻唄を歌いながら帰っていった。

軍歌である。

「貴様と俺ーとーはー同期の桜～♪」

はぁあ、とアカギは溜め息をついた。

※※※

カガが毎晩フラフラと外へ出ることに、アカギが気づくのにはいくらもかからなかった。

アカギはある晩、後を追ってみた。別に理由などない。ただ単に気になっただけだ。

「…貴様と俺ーとーはー…同期の桜ー…同じ航空隊のー…庭にー咲ーくー…」

鼻唄を歌いながら歩くカガを見失うことはなかった。梯子を使って屋根によじ登り、ごろんとそのまま仰向けになる。

憑かれたように梯子をのぼると、カガは両手を枕に、片膝に足を組むようにして夜空を眺めていた。

カガは、それまで見たこともない顔をしていた。

完全なる無表情。

夏の夜風がカガの髪を舞い上げ、その完全なる無表情を隠した。

「…天の川の端と端には愛し合う男女がいて、七夕の夜にだけ逢瀬をするってさ」

アカギは一瞬、何を言われたか分からなかった。気づけば、カガがアカギを真っ直ぐに見ていて、いつものように笑っていた。

「それ、ほんと？」

アカギは溜め息をひとつ落とした。

「寝ないと余計バカになるぞ」

「しょーがねーじゃん。眠れないんだから」

毎晩か？　と訊こうとして、やめた。代わりにカガの横にアカギも仰向けになった。

「…空の向こうってさ」

ふと、カガは夜空を見ながらこぼした。

「…何があるんだろうな…」

「宇宙だろ」

「んなコト言ってんじゃねーよ！あー夢のない奴だなぁ！！」

「この状況下で夢を語れる方がおかしいんだ」

そう…長い戦争の時代、それは約１５年前に遡る。

不景気に苦しむ帝国では、軍人や一部の政治家が、隣国の領土を奪うよう主張した。だが隣国は粘り強く戦い、戦争は長引くことになる。

行き詰まった帝国は石油などの資源を手に入れようと周辺地域に軍を進めたが、隣国を援助していた連合国と対立することになった。

そして４年ほど前、帝国は連合国軍の基地などを攻撃し…ついに連合国軍との本格的な戦争へと突入した。

最初こそ勢いのあった帝国軍ではあったが、次第に敗北を重ね、連合国軍が優勢になっていった。

それでも、戦争は続けられた…。

「なあアカギ、お前の大切な人たちさ」

ぴく、とアカギは顎の先を揺らした。

「待ってるぜ、きっと。早く帰ってやれよ。お前の居場所は、ここじゃねーだろ。…アカギ」

カガは目をとろとろと閉じた。

「…一緒に、帰れたらよかったな…」

それはアカギではなく、カガ自身の行く末を言ってるように聞こえた。

※※※

戦闘機のエンジン音で目が覚めた。

まだ起床時刻には早い時間、アカギは滑走路へと走っていった。

そこには数人の見送りがいるだけで、戦闘機はすでに空高く舞い上がっていた。

「…カガ…？」

見えたわけじゃないが、なんとなくそんな気がして呟く。

「ああ。奴の最初で最後の単独飛行だ」

その言葉に違和感を覚えたアカギは、ただ首を傾けてみせた。

その顔に、見送っていた1人がくしゃりと笑う。

「信じられるか…？　あいつ、燃料片道分しか積んでないんだぜ」

アカギが目を剥くと、さらに顔を歪ませる。

「あいつ、…代わりに爆弾積んでるんだぜ」

その言葉の意味を悟るのには、いくらもかからなかった。

…体当たり攻撃。魚雷・爆弾などを抱いたまま敵艦船に乗機もろとも突入する。

『…空の向こうってさ…何があるんだろうな…』

「…貴様と俺ーとーはー…同期の桜ー…」

「…アカギ…？」

「同じ航空隊のー庭に咲くー…」

…空襲により帝国全土で多くの生命が喪われ、一部では連合軍が上陸し、激しい攻撃を受けた。

だが、…それでも戦争は続けられた。そして…。

その夏、帝国に2発の原子爆弾が投下された。原爆で街は破壊され、一瞬のうちに多くの人々が亡くなった。

…もう、帝国に戦争を続けていく力は残ってなかった…。

そして、帝がラジオを通じて帝国が降伏したことを告げた。…戦争は終わったのだ。

使用機数・２３１４、うち帰還１０８６、突入未帰還１２２８。戦

死者数・約２５００名。

カガが飛び立ってひと月後のことだった。

※※※

…あれから６０余年。

「覚えてるか…？　アカギだよ。すっかり年老いてしまったがな」

彼は…アカギは慰霊碑の前で手を合わせた。

『早く帰ってやれよ。お前の居場所はここじゃねーだろ』

「…確かに…私の居場所はあそこではなかった。お前は志願兵で、私は徴兵されただけだった。…だが」

アカギはそこにカガの名前を見つけると、たしなめるような目付きをした。

「…あのときのお前の居場所は、空の向こうじゃなかっただろう？…皮肉にもお前の出陣がひと月遅ければ、お前と一緒に帰れたのに…」

アカギは秋の空を見上げた。そこにはちょっぴり寂しい秋風が吹く。

「また、会いに来るよ」

答える者は、いなかった。

秋の空は、少し白っぽくて天が近い。

何度も季節が移ろい、老い先短くなった自分もまた、空の向こうに行くその時まで。

友の分まで、生きようと思う。

終。

（後書き）

歌詞引用：『同期の桜』作詞・西条八十

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8733j/

あの空の向こう側

2010年10月20日20時07分発行